

令和4年度第1回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

令和4年9月8日（木）10時00分から12時20分

2 会場

広島市中区地域福祉センター5階 大会議室1・2

3 出席者

懇談会構成員

| 団体名・役職 | 氏名 |
|-------------------------------|-----------------|
| 被爆体験証言者（平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事） | 原田 浩【座長】 |
| 広島県原爆被害者団体協議会 事務局長 | 前田 耕一郎 |
| 広島市立大学広島平和研究所 所長 | 大芝 亮 |
| 広島大学平和センター 准教授 | ファンデルドゥース 瑠璃 |
| 特定非営利活動法人 ANT・Hiroshima 理事長 | 渡部 朋子 |
| 特定非営利活動法人ひろしまジン大学 代表理事 | 平尾 順平 |
| 一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長 | 橋村 秀樹 |
| 一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会 会長 | 畝崎 雅子 |
| 広島市市民局国際平和推進部 部長 | 松嶋 博孝 |
| 広島市経済観光局観光政策部 部長 | 高石 実 |

（計10名）

事務局

広島市経済観光局観光政策部 観光プロモーション担当課長、課長補佐、主査、主事 （計4名）

4 議題

- (1) 令和4年度上期の取組
- (2) 令和4年度下期の取組（予定）
- (3) 意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

0名

7 会議資料名

資料 ピースツーリズム推進懇談会（令和4年度第1回）

8 発言の要旨

【1 令和4年度上期の取組、令和4年度下期の取組（予定）】

（前田委員）

説明いただいた中で、分からない点があったので、質問をさせていただきたい。

5 ページの情報発信の強化の中で「ガイドがないとスポットを見落とししてしまうという意見があったため、情報発信の強化に繋がりたい」という説明があったが、具体的にどのようなことをイメージしているのか、どういったことができるのか。

なぜ、このような質問をしたかという、グーグルマップで必ずしも正確な位置が出る訳ではなく、この辺だろうと思って行っても、結局場所が分からなかったという話を聞く。これは難しいのかもしれないが、何か良い方法がないものかと思う。

また、10 ページのインターネット調査を元に考察した中で、20 代などの比較的若い年齢層をターゲットにしたのは、実際に反応を寄せた、いわゆる深掘したい層の人たちが多かったのか、あるいは観光政策部がターゲットの中心にしたいと思ひ、このように設定しているのか。

（事務局）

5 ページの情報発信の強化については、以前からこの懇談会の中でも言われているように、説明板の強化といったことも必要だと考えている。他にも、携帯で調べるとすぐに情報が出てくるような仕組みや、現地でQRコードの読み取りをすると詳細な情報が出てくる仕組み等、整備が必要と考えている。また、コースを周る前に、事前勉強ができるような情報を盛り込んだものを作るなど、今後も研究しながら情報発信の強化に努めていきたい。

10 ページのインターネット調査の結果については、ピースツーリズムに参加したいと答えた人の内4人に1人が20代であったという結果によるものである。

（瑠璃委員）

様々な取組があると改めて認識させていただいた。インスタグラムも地道にアクセス数が増えているということだが、例えばツイッターでもハッシュタグがあるとアクセス数が増えるという研究結果が出ている。お互いの投稿に自分の意見を載せていくような取組や仕掛けは行っているのか。興味があって投稿する人は他の投稿も見ている傾向があるため、他の人の投稿にアクションを起こすような仕掛けがあればアクセス数も増えると思う。

また、次の被爆樹木ツアーについては、非常に面白い取組だと思う。株式会社中国新聞社との連携ということだが19名の応募というのは個人的には少ないと感じた。広く周知されていればもう少し応募がありそうだが、周知はどのように行ったのか。また、5名を選抜されて実際にガイド研修を行ったと伺ったが、選抜について基準があるのか。ガイド研修の実施内容について講師や期間、既存のガイドがどの程度関わっているか教えていただきたい。

次に、ガイド資格の認定制度のようなものがあるかどうか教えて欲しい。例えば、観光政策部認定バッジというようなものがあれば、目的としてもやる気が出るだろうし、一つのステータスとなるのではないかと思う。

最後に、ダークツーリズムからピースツーリズムに変えていこうという取組は本当に大切だろうと思う。ダークツーリズムは必ずしも原爆に対する恐怖という意味ではなく、研究によると人の痛みであるとか不幸というものを第三者として覗き見るというような意味がある。ピースツーリズムは被爆の実相をしっかりと受けとめながら被爆者の思いや、被爆者が経験されたことをしっかりと受けとめながら学ん

でいく、自分が当事者のように思って積極的に取り組んでいくところが、覗き見ではない、他人事ではない、自分にとって大切な被爆の実相であり、その後の復興であり、今の広島であり、将来の広島であるという意味合いでピースツーリズムになるのではないかと考えている。

取り上げていただいた令和2年度に私たちが行った全国2000人対象ピースツーリズムインターネット調査の結果であるが、これも結局、当事者感というのをどう醸成していくかということに目的があった。それをどのように取組に活かしていくかももう一度一緒に考えていきたい。

そのような観点から見るとピースパズルは非常に面白い企画だと思う。このピースパズルの中で目的がどう設定されているのかを伺いたい。その目的の中に、10代20代の人たちが、昔あったこと、歴史の1ページについて勉強するというよりも、例えばウクライナ紛争について考えながら、いつ戦争が起きてもおかしくはない、いつ核兵器が使われてもおかしくはないという現状に目を向け、当事者感をもって被爆の実相を学ぶことができるような環境を盛り込んで作っていただけたら良いと思った。そのような何か仕掛けや企画があれば教えていただきたい。

(事務局)

まず、Instagramのアクセス数を増やすための取組や仕掛けについては、「#平和」や「#広島」などピースツーリズムに興味がありそうなアカウントにリーチするようなハッシュタグを考え、発信している。また、同じようなハッシュタグを使っているアカウントに対してこちらからも記事を見に行くということをやっている。

被爆樹巡りガイドの募集は、株式会社中国新聞社が8月1日の朝刊に広告を掲載したほか、観光政策部から関連のある観光ガイド協会にメールを送付した。試験的な取組で募集人数は若干名であったため、結果的にガイド経験等を考慮し、5名になったと聞いている。

研修は、8月に座学が1回と、実際に歩いて被爆樹木を巡る研修が1回の計2回行われた。2回目の被爆樹木巡りは、木の持つストーリーやポイントについて丁寧に解説があり、受講者もそれに対していろいろ質問をするといった内容だった。今後はツアー実施に向けて何度かリハーサルを行うと聞いている。講師は広島の被爆樹木に詳しい、樹木医の堀口力先生が務めた。

ダークツーリズムからピースツーリズムに変えていき、平和と観光を結びつける仕掛けについては、瑠璃委員の指摘のとおり、我々も重要な位置付けとして捉え、今後も推進していきたいと考えている。各委員の御意見を参考にさせていただきながら具体的に考えていきたいと思っている。また、認定制度については、非常に面白い取組だと思うので、平和推進課や株式会社中国新聞社と情報共有させていただく。

ピースパズルは、広島に来る若者たちが自分の足で広島市内のピーススポットを訪れ、出される問いを考えて学びを深める「アクティブラーニング」の形を取り入れた平和学習である。デジタルスタンプラリーを体験し、広島平和記念資料館以外のピーススポットを知り、考えることで、何度も広島を訪れたいような形を作る。将来的には修学旅行生の新しい平和学習ツールとして実用化できるよう、認知度の向上とブラッシュアップを図ることが目的である。

(平尾委員)

ピースツーリズムが立ち上がった時から、民間、市民、企業など横の連携ができると良いという話があった中で、今回、株式会社中国新聞社や一般社団法人お好み焼アカデミー、平和文化月間においてはいろいろな市民団体あるいはNPO等との連携が図られているということを見ると、ピースツーリズム

ムを立ち上げたことによって、分野を超えた横の連携が図られるきっかけになったという意味ではすごく意義がある取組だと改めて感じた。

その上で一つ思うことは、ピースツーリズムを立ち上げたときには、多くの人たちが広島を観光するのであれば平和について考えてほしい、思いを巡らせてほしいということがあった中で、最初は裾野を広げていくことが一義的な目標として大きかったと思うが、ピースツーリズムが大成していくためには、その人たちが次にどのようなステップを辿っていくのか、今度は深めていくというプロセスも同時に見ていかなければならないのではないかと思う。

多くの人たちがイネを押ししてくれるということは認知が広がるという意味では非常に大事だと思う。その次に市として平和行政の中で、どうピースツーリズムを次に引き継いでいくのかということが俯瞰して見たときに大事なステップであり、そういう時にはもう少し学術的などところとの連携であったり、もう少し深めるためのプログラムを開発したりというような流れが見えてくると思う。

(畝崎委員)

先ほどの説明の中で特に素晴らしいと思ったものが二つある。

まず一つが、国内のジャーナリスト研修。是非これを日本に在住している海外メディア向けに英語や中国語などで行なえるよう考えていただきたいと思う。

今、国内外問わず、濱口監督の「ドライブ・マイ・カー」が評価されており、世界的に広島が認知されたと思う。私はこの映画が広島市にとって100年に1度くらいの映画だと考えている。それまで1950年代の白黒映像で、破壊された広島印象から、広島はこんなにも多様性があり、外部の人を受け入れ、自然が美しく、何より再生した街であるという印象を受けると思う。多くの人々が破壊と復興という言葉に思い入れがあり、それも当然だと思うが、復興と言うと街や建物の復興という印象を受けると思う。そういった意味では人間の心に着目し、広島は破壊を経験し再生した街であり、英語で言うと“Resilience”日本語でも最近使われるようになってきているが、ちょうど柳の木に雪が積もってしなっているものが雪をパンと跳ね上げてまた元に戻るイメージで、それが広島の持つ強靱な美しさ、力強さではないかと思うので、国内外問わず「ドライブ・マイ・カー」を一つの共通言語として広げていけるのではないかと思っている。

もう一つ、被爆樹巡りにについても素晴らしいと思う。今、被爆樹木についての関心が高まっていて、それをボランティアとして参加したいというニーズは多くあると思う。これを株式会社中国新聞社との連携にとどめず、被爆樹木を学びたいというボランティアに要請するといった広がりも可能だと思う。

8月6日の朝日新聞のコラムに広島在住の松本若次さんの関係者が取り上げられていた。松本若次さんは日系移民で地御前からアメリカに渡り写真技術を身に付け広島で写真館を開いた人物であった。その方の写真が地御前に残っており、2,000枚の写真が広島市に寄贈され、寄贈当時は画期的な発見だと取り沙汰されたそうである。私は松本若次さんを存じず、その事実も知らなかったことを恥じた。平和記念資料館にとっても印象的な相生橋周辺を写したパノラマ写真がある。それも松本若次さんの2,000枚の写真のうち一枚であることも知った。若い世代はきっと破壊され、悲しんでいる、または亡くなった人などの辛すぎる事実を見たいのではない。原爆投下前の日常の風景、運動会などで楽しそうにしている、そういった1942年までに取られた2,000枚の写真のような切り口で広島を見てもらうことも重要ではないかと思う。そういったものもピースツーリズムの対象として検討していただきたい。

(大芝委員)

先ほどのダークツーリズムとピースツーリズムの違いについてや当事者意識をどう持たせるかというのが議論の中核になるということ、裾野を広げることと深掘りをするることによる拡大と進化の方向性、破壊と復興に関して建物の復興だけではなく、心の部分の再生という切り口、といったことが他の委員の話の中で出ていたと思うが、改めてピースツーリズムの目標は意義深いものであるという感想を持った。

4 ページのインスタグラムのフォロワーのところで福岡、大阪、神戸の誘客イベントでの効果について教えていただきたい。効果というとすぐにわからないところもあると思うが、手応えのようなものがあれば教えていただきたい。というのも、広島ピースツーリズムが他の地域でどのように共有されていくのかということに興味がある。また、広島以外の地域に目を向けることは今後、ピースツーリズムの裾野を広げ、後々に深掘りに繋げていけるのではないかと考える。

(事務局)

イベント来場者に対して、広島市全体の観光情報の紹介やノベルティを配布するといった中で、ピースツーリズムの紹介もした。その中で何人かの人に話を聞いてみると、特に若い人は原爆ドームのことは知っているけれども、ピースツーリズムのことや周辺の平和関連施設のことはあまり知らない人が多く、ルート設定などを行っていることに驚いていた。そういった意味では取組を知ってもらえた、あるいは原爆ドームだけではない平和関連施設などを知ってもらえるきっかけになったと捉えている。

(渡部委員)

まず、一つ具体的な例を皆様にお話しさせていただきたい。経済観光局から中東のインバウンドに関わっている旅行者の方を紹介いただき、その方が私共の団体を訪ねていただいた際、アラブ首長国連邦で非常に大きなブックフェアがあるということを知っていただいた。そこへ広島から出せるものを探しているとのことだったので、ちょうど禎子の絵本プロジェクトや、千羽鶴、折り鶴を含めて、様々な映像データを提供した。これは素晴らしい機会であり、繋いでいただいた経済観光局の方にはお礼申し上げたい。アフリカ出身の方によると、かなりの人が広範囲から来て、いろいろと見ていただけとのことであった。そういったインバウンドの事業者と一緒に世界に発信するという機会があるということを実感した。もっとそういった方を通して国外に向けて広島の知名度を上げていく、あるいは広島を知ってもらえる機会を作り継続して広げていくことが大事であると感じた。被爆者の方が海外へ行って被爆体験講話を開くということと同時に別のルートで広島を伝えていくことも大事ではないかと思っている。

そういった意味では、国内ジャーナリスト研修を国外のメディアにというのは素晴らしいアイデアだと思う。私も国内ジャーナリスト研修に2年続けて参加したが、大きな学びがあった。

少し具体的な話をする、ガイドがいなくてスポットを見逃してしまうという意見があったが、先ほどの事務局の考えでは、より細かなスマートフォンを使った説明があればそれを補えるという説明だったと思うが、それでは補えないと思う。人に出会わないとダメだと思う。ピースツーリズムの今の取組の中で、少し手が薄いと思うのが人と出会う機会を創出することである。それはおそらく平尾委員のおっしゃった次に深くするためには、人と、できれば一対一で出会う機会をどれだけ作れるか、一対多数であっても個別に一対一の関係が作れるという場を私たちがどれだけ官民協力して作れるかということが、次に深くするためのステップになるのではないかと思う。以前、被爆伝承をしている方に、なぜ被爆伝承を始めたのか聞く機会があり尋ねたところ、東京出身の方が、たまたま広島にフラッと来た際、

被爆者の話が聞きたいと思ったが、一人であるため、なかなか難しかった。しかし、かつて学校の先生をしていた被爆者の方が一人、対応してくれたらしい。なおかつ当時の啓発課の職員が一人のために部屋を用意してくれたらしい。そこで本当に良い出会いをされたことがきっかけで今でも縁が続いており、伝承者になるため東京から通って来てくださる。そういった出会いの場所を官も民も挙げてどれだけ作れるかということがすごく大事だと感じた。本当に広島を好きになって、自分の第二の故郷だと思ってもらうようになるためには、人に出会うということが大切だと思うので、今まで築き上げたピースツーリズムに様々な努力があったことは承知しているが、さらにこの上に人に出会う場を創出できれば良いと思う。その場所をどういう環境の中で、どういう風に出会っていただくと、その出会いが深いものになるのかということ私たちは考えていかなければならない。ジャーナリスト研修もガイドがいて人を介して広島を知ってもらえたということをも自分も関わっているものの立場として思った。

それからもう一つ、他の委員からも被爆樹木について意見があったが、私も10年近く被爆樹木に関わってきた者として、私の所にも被爆樹木巡りのガイドの依頼が多いと感じている。私たちは特に被爆樹木の価値についてお互いに考え合うような話し方をしている。私が知っている限りで小学校が3校、基町小学校、矢野南小学校、中野小学校が被爆樹木を柱に置いて平和教育を行っている。これはおそらく、被爆樹木には、被爆者の話とはまた違うが、また深い学びの泉があるということではないかと思う。是非そういった教育的な効果、人に出会うように被爆樹木に出会うという機会を作る努力や、そういったガイドの養成をしていく、株式会社中国新聞社も含めていろいろな人が被爆樹木へ重ねる想いに合わせてガイドができれば良いと思う。そして何よりも一番大事なことは被爆樹木を保全することだと思う。この10年で10本、被爆樹木は無くなってしまった。このまま放置すれば広島の宝が無くなってしまうということも大切なメッセージだと思う。多くの人と一緒に大事にしながら学んでいければ嬉しく思う。

それからもう一つ非常に気になる点がある。おそらく大きな目玉として取り組んでいるのだと思うが、ピースパズルの内容は誰が作っているのか。ピースパズルの中身、コンテンツは誰が考えて誰がどのように作っているのか。事務局か、それともどこかに外注しているのか。私たちはこれについて意見を聞かれたことは一度もない。

(事務局)

ピースパズルについては、プロポーザルで業者を選定し、委託で事業を行っている。実際には、一般社団法人 Hello Hiroshima という業者が受託し、ピースツーリズムで設定されたルートも参考にしながらどこを巡ってもらうか検討を進めている。

(渡部委員)

一般社団法人 Hello Hiroshima というのは何か、会社か。第三世代が考えるヒロシマ「」継ぐ展のことか。

(事務局)

プロポーザルの受託者は一般社団法人 Hello Hiroshima でピースパズルのコンテンツ開発に、第三世代が考えるヒロシマ「」継ぐ展が携わっている。広島ピースツーリズムのサイトを参考に事業の組立をしており、写真なども提供している。また、ピースパズルの実施内容についてはワークショップを開き、若者にどういったことを知りたいか、どんな学びをしたいかというのを聞いた上で、若者が考える

平和についてのデータベースを作っていきながらピースパズルの制作を行うこととしている。

(渡部委員)

若者に聞いてパズル開発をしてコンテンツを決めていくということは、悪い事ではない。ただ、世代を超えた考えが、こういったしっかりとしたコンテンツを作る時は必要なのではないか。ピースパズルというのは良い取組だと思うが、私もボランティアの人たちが考えてやっているのを見ているが、先ほど平尾委員がおっしゃった「次に深くするには」という目線なのか、それとも広く知ってもらうためのものなのか、それによって作り方が変わってくると思うが、第三世代が考えるヒロシマ「」継ぐ展と一般社団法人 Hello Hiroshima だけでこの中身を決めて、せっかくだが私たち委員が何の役にも立っていないというのはもったいないと思った。ターゲットが若者でも世代を超えて被爆者自身や伝承者にも見ていただくということが必要ではないかと思う。そしてお互いに世代を超えて意見交換ができる場をピースツーリズムが提供できたら有り難いと思う。おそらくコロナ禍であるため、この中で取り上げられてないと思うが、ホームステイが難しくなっている。たくさんさんのホームステイ協会がたくさんさんの国内外の人々を受け入れることによって、自国に帰った後でも広島が忘れられない街になっていることから、従来からある団体や力をこの中に取り込んでいくことも、これからのピースツーリズムにはあっても良いのではないかと思う。

(橋村委員)

市が計画をしている中で、一つ思ったのが、3 番に書かれている深掘りしたい層について、世代別に考え方が全然違うということを是非考えていただきたい。例えば団塊の世代 J r からはじまり、ゆとり世代、ミレニウム世代、そして Z 世代へ移っていく中で、昔こうだったからこうだというのは特に Z 世代にはほとんど通じないと思う。今の Z 世代はテレビや新聞を見ないし、スマートフォンなどで SNS を使い情報を得る世代である。そういった中で、他の世代と同じ学び方をするのかとなると全然入ってくるのが違うと思う。私が親や親戚から聞かされたことは、たまたま近所にも同じ境遇の人々がいて、それを見たから戦争や原爆のことを自分なりに理解できた。しかし今は、形として原爆ドームなどは残っているが、ほとんど状況が残っていない中でその状況を説明しないといけない。例えば全国 2000 人調査結果に書いてある浮遊層で、灯ろう流しのように気軽に参加できることであればやってみたいというように軽い感覚で楽しめるのであれば、そこから平和学習に入っていこうかなと思う人もいる。いかに 20 代あるいはそれより若い人たちが広島に来た時に、平和学習という重たいイメージが彼らの中にある上で、そういうものを払拭しながら「楽しむ」という言い方はおかしいかもしれないが、そのようなところからいろいろ感じてもらいたいと思う。それで広島の同世代の学生と県外の学生による意見交換などをやってみるのも良いのではないかなと思う。

Z 世代は昭和の時代の旅館などにデザイン的に興味がある人も少なくない。旅館側からすると新しい旅館に建て替えないと集客できないと思うところだが、これが我々の世代の考え方で、Z 世代の考えでいくと、「それは残して置いてください。そのランプがいいんです。その扉がいいんです。」というように我々世代とは大きく考え方に差がある。そういったところを念頭に置きつつ、今後深掘りをする中で、世代別の考え方を取り入れた平和学習を作っていく必要性を感じた。

(松嶋委員)

いろいろと学ばせていただいたことがあった。中でも瑠璃委員の分析を興味深く見させていただいた。

深掘りしたい層と浮遊層といった層に違いがある中で、どちらかというところと平和行政で扱うのは深掘りしたい層になると思う。そうした中で、構えて、意識して目的をもって広島に来てくれる方に対してより深く学ぶ機会を与えることは必要なことだと思うが、あまり考えず、広島に来て、たまたま平和について学ぶことになった人に対して、知りたいというきっかけをそこで得られたというようなことが広島の共感を広げるために大事だと思うのと、そういった方に目的意識を持って、また広島に来てもらうような働きかけというのにも必要になってくると思う。そういった中で市民と民間の協働体制の構築というのが大事になってくるということ、本日の話の中で感じた。平和行政の中でも碑巡りであるとか被爆樹木巡りをやっているが、回数などを見るとまだまだ少ないということがあると思う。そういった機会を増やしていろいろな方が気軽に参加できるような形が大事だと思う。ただ、やはり行政だけではできない面もあり、民間のガイドなどの要請も必要になってくる。そういったガイドをしている方との情報共有というのにも必要だと思うし、一緒にやる中で人材育成やコース開発、あるいは行政側でできることとして広報であるとか、活動の場の提供であるとか、そういったことで協働ができるのではないかなと思う。

また、ピースツーリズムのイベントの中で 13 ページのネットワークの構築を図るとあるが、ここにある団体を全て存じているわけではないが、中には日頃から平和活動を中心に活動されているわけではない団体でも、活動に賛同していただいて一緒にイベントを行うという形をとっているのかと想像する。その中で質問だが、今回のネットワーク構築に係る中で、一緒にイベントをされている団体というのは、どういった形で参画することになったのか。あるいはそれぞれ得意な分野というのがあるのか。そういった方々とネットワークを構築し広げ、続けていくことができれば、より広島に来ていただき、感じていただける人を増やしていけるのではないかなと思う。

(事務局)

各団体は、既にそれぞれで平和関連活動を行っている団体である。例えば sokoiko! Cycling tours (株式会社 mint) はぴーすくるを使ったガイドつきサイクリングツアーを企画・実施している。そのほか、特定非営利活動法人 Peace Culture Village (PCV) は平和記念公園を中心として、ガイド活動をしている。

そういった方々の横の繋がり、ネットワーク構築というのも本事業の目的の一つで、各団体の強みが連携することで、さらなるイベントに繋がるなど、全体として活動が深くなるよう、ネットワーク構築を促進していくような周遊イベントの実施を企画している。

(松嶋委員)

そういった方のとりまとめは今回で言うと一般社団法人 Hello Hiroshima のネットワークを活用して声掛けをしているのか。

(事務局)

そうである。

(高石委員)

ピースツーリズムの体験型周遊イベントのところで平和をテーマとして活動している民間団体のネットワーク構築が非常に難しいところだと思っている。各団体で活動方針や規模が違い、様々な形態がある中で、我々行政がどのような関わり方をすれば各団体の活動をより促進することができるのか、や

り方を間違ってしまうと活動を妨げてしまうようなこともあり得るので、しっかり丁寧にヒアリング等しながらネットワーク構築の取組をしていく必要があると思う。また、渡部委員の説明にもあったとおり、被爆樹木の説明をQRコード等のデジタル情報で行うだけではなく、対人でしっかり説明を行うことが大切だという御意見をいただいたが、自分の経験を振り返っても、人から聞いた話や対人で何かをしてもらったという経験は、ものを読んだり見たりという経験と全く違うレベルで伝わってくるため、非常に大切なことだと思った。特に若い世代は経験を大事にするという傾向があると思う。

今後の取組を先取りするような形になるが、観光の立場で言うと、大きな転換期が3点ある。1点目は最近、入国の審査基準の緩和があったように、コロナの収束の見通しが立ち始めたということ。2点目は来年開催されるG7サミット。3点目は2025年に広島駅駅舎の建て替えが終了し、大阪万博が開催されるということ。これらによって広島へ訪れる人が増加することが想定される。そのため、ピースツーリズムを活性化させるうえで、まず広島に来ていただいて、その方に平和拠点施設を巡っていただき、平和を感じていただくというステップを踏んでいくことになるので、広島に来ていただけるということは、ここ数年、広島にとって追い風になるということである。来られる方をどういった形でピースツーリズムで想定している取組に繋げていくかというところの情報発信であるとか仕掛けというのがより大切になる。特にG7サミットでは首脳以外にもメディアやG7以外の各国の高級官僚も来るため、首脳に拠点施設を巡っていただく、あるいは首脳がセキュリティ上難しいということであれば、首脳の配偶者向けのプログラムもあるので、そういった機会に拠点施設を巡ってもらえないかと考えている。

(原田座長)

他に御意見はないか。

(渡部委員)

G7に関連して、C7という市民社会におけるG7のようなものがあって、全国でG7コアリションというものが既に立ち上がっている。是非皆様にもこのC7に入っていただきたい。首脳会議の一週間前に様々な分野の課題についてワークショップやディスカッションを行う予定になっている。G7の方に広島県民会議が力を入れていると思うが、C7は広島にとっては大事だと思うため、こちらの方に皆さんの力を結集していただき、せっかくの機会なので、様々な世界的な課題について話し合うことができればと思う。そしてもちろん核兵器廃絶に向けての大事なメッセージを世界の市民社会に向けて発信できる場を作りたいと思っている。是非皆さんC7に入ってほしい。

(前田委員)

レジュメや各委員の発言を聞いて思ったが、取りまとめに書いてあるピースツーリズムの概要を今一度見てみると、ピースツーリズムは原爆、平和というところに圧倒的な重点を置いている取組であろうと思う。ただ、会議の発足当初からいろいろな意見が出る中で、フォトコンテストの応募作品を見て分かるように、みんなが思う平和というのは、必ずしも原爆だけに絞られたものではない。平和な暮らしであるとか日常であるとか、そんなことも感じ取ることができると思う。

レジュメに示してあるのは、原爆投下後の復興であるとか再生を念頭に置いたものだと思う。中には安らぎであるとかそういったことに触れていただきたいと思った。

それと、広げるということについて、被爆樹木についての研究結果を見ても分かるように、市だけでやるのではなく様々なところと連携していることを見て取れる。ホームページを見て、面白いと思った

が、周辺で似たような平和活動をそれぞれの考えを持ってそれぞれの団体がやっているのだから、ピースツーリズムのホームページに連携させる動きがあっても良いのではないかと思った。

それともう1点、渡部委員が人との繋がりのおっしゃったが、私もピースパズルについて人との繋がりがもう少しあっても良いと感じた。いろいろなところに旅行した際に、その地の景色だけではなく、その地で会った人との会話や親切にされた経験というのは非常に大事なことだと思う。例えばガイドでも良いし、街で出会った人でも良いので、市民参加というものがあっても良いと思うので、取組に加えてほしいと思うし、レジュメにもその意向を反映してほしいと思う。

(原田座長)

今配ったのは、委員の意見を集約して取りまとめたものである。内容について補足をさせていただきたい。これは市長に報告をしたときの資料の一部である。中には、ほとんど手つかずのところがある。この懇談会としてどのような方向付けをするのが良いのか、意見をいただきたいと思う。この中で気になるのが、市民が来訪者に対して説明したり案内したりできる環境づくりについてである。前から議論している説明板について、各委員と一緒に巡ったことがあるが、そこで、説明板が極めて貧弱であると指摘を受けた。英語表記もなければ何が書いてあるのか分からないようなものが随所にあった。そういった基盤整備はやっていくべきだと思う。全局に渡る仕事で、それぞれが同じ方向を向いてやっていくべきことである。

一つは来訪者と市民の接点を作るべきではないのかということ。これは委員からも意見があったが、どういった形で積み上げていくのが良いのか。大げさなものを作るのではなく、屋根があり椅子があり、できれば近くにトイレがあれば、市民と来訪者の接点になるのではないか。

次に、小学校の平和資料館がどうあるべきか。本川小学校の平和資料館を土曜・日曜に開館するよう要請し、平和推進課と教育委員会の協議の上、開館が決まった。本川小学校の場合は広島平和記念資料館の積極的な協力もあってパネルの改修などもできたが、整理することがたくさんあるというのも事実である。広島平和記念資料館は公益財団法人広島平和文化センターが指定管理で運営しており、そうすると平和推進課が動く必要がある。また小学校は小学校で教育委員会が動かなければいけない。連携プレーがあって初めて実現する。また、そういった整備は本川小学校だけではなく、できるだけ早く袋町小学校もしなければならない。袋町小学校も陳腐な展示になっている。私が現役の時に袋町小学校の被爆建物を残すことにして、その後、展示内容を決めているが、その後おそらく更新していないのではないかと。袋町小学校のビデオは古いし映像も悪く、英文表記も少ない、中身も良くない。外国人がこのビデオを見ても、日本語が流れているだけで理解できない。そういったことがあるため、袋町小学校も早期に改修する必要がある。また、幟町小学校の展示は、前の校長が積極的な方で、幟町の町内会の役員と一緒にあって禎子のコーナーを作った。その後、幟町小学校も実質的に十分な対応ができていない。校舎内に展示をすることには限界がある。教員の中で平和学習を行うことの位置付けや手続きについても解決しないといけない。白島小学校も大量の被爆関係を含む郷土資料を空き教室を活用して展示しているが、専門家の関わった展示ではない。そう考えると旧市域のほとんどの小学校はそのような平和教育の拠点になり得る。

高石委員も言ったように、来年はG7の対応をしなければならない。G7の開催時期は決定しているので、ここからあと半年間で何ができるか、この懇談会で何をどうすべきか、市民のおもてなしの部分も含めて決めていかなければならない。G7の開催にあたり、県、市それぞれの立場があると思うが、来訪者のおもてなしをするということでは、市民が主体になってやれることであると思う。

もう1点気になるのが、広島城にある旧陸軍司令部跡で、老朽化して危険であり入ることができない状態が続いている。市民からは、早く公開してほしいという声をいただいている。組織を越えて対応しないと、前に進まない。緑政課は建物の管理という分野では対応できるが、ここに文化財、平和、観光の関係部署が連携することにより、今後の在り方についての議論を進めていただきたい。

その他、広島の旧理学部1号館も議論が進まない中、老朽化が進んでいる。議論の内容も市民に見える化できていない。そのような状況の中なので、我々としては取り組みづらい面もあるが、取りまとめにも入っている事柄なので、是非議論していただきたい。

被服支廠についても、一度は県が一部解体する方針を出したが、関係者が先頭に立って反対運動を行い、市長の理解もあって、全棟保存が決まった。財産管理権を持つ県としてはできるだけ管理費を少なくすることに軸に置いているため、文化財的な価値であるとか過去の歴史については、担当課長でさえ勉強していなかった。市として今後も関わり、どう使うのか考えていきたいと思う。その関連で最近の県の動きを見て懸念しているのは、被服支廠が被爆当時どのような状況だったのか、県の職員も関係者も全く理解していないように思える。被服支廠で無残な死を遂げた人のことを考えると、そこでレストランやホテルを作るという発想にはならない。ただ、それは時代の移り変わり各世代によっていろいろな考えもあるというのは理解できるが、被服支廠は被爆の原点として大事にしていきたいと思うし、県もそのつもりで動いていただきたいと思う。そういったことを踏まえた上で、ピースツーリズムの問題も合わせて、次の意見交換を行いたいと思う。

(事務局)

先ほど渡部委員から御意見があったピースパズルの内容について、各委員にも相談、協力いただきたいと思う。

(原田座長)

少し補足したいことがある。私は被爆50年の前後に平和事業の担当をしていたが、わずか5年間のデータを整理してみたところ、私に対応しただけで、150か国の要人が広島に来ていた。その中で、国家元首や国家議長という方は50件も受けている。最近では8月6日に合わせて各国の人々が広島を訪れるが、ほとんどが東京から来る駐日大使ばかりで本国から来る人がほとんどいない。被爆50年という節目の年ではあったがこれほど多くの要人を迎えたということは、国連加盟国が190か国程度であることを考えると、たった5年間で国連加盟国の3分の2が広島を訪れたことになり、整理をしてみるととても驚いた。それから報道関係の方が300組ほど訪れた。ほとんど海外の報道機関であり、イギリスのBBCの報道クルーが3組来てくれたのが特に印象に残っている。本日もこの懇談会に記者の方が来てくれているが、いかに報道関係の人を大事にし、我々の気持ちを多くの人に伝えてもらえるようにするかを考えていかないといけない。

(前田委員)

今回の報告を受けて、若い人たちが一生懸命取り組んでいることを改めて感じた。私は被爆者団体に属する者として、とても嬉しく思う。嬉しく思う反面、活発に動き協働していただいている中で、こういった団体というのは被爆したものや被爆した人たちの思いを受け止めて動いていただいているのだと思うが、被爆者は高齢化しており、彼らの伝えたいことはたくさんあるが、この先10年間証言ができる保証はない。被爆者団体としては5年程度しか難しいのではないかと思ってもいる。私たちへのア

アプローチは証言を聞きたいといったものや、碑巡りの対応をしてほしいというものが主で、東京等のイベントで意見を求められることもあるが、横の繋がりというものがほとんどできていない。当団体の反省点でもあるが、残された時間があまりないという中で、もう少しアプローチをしていただきたいという思いはある。一生懸命やっていたという思いもあるし、新しい感性でいろいろと動いてくれているというのは、とても期待していることでもあるが、一方で、限られた被爆者の時間というのも大事にしてほしいと思いながら、今回の資料を見ていた。

もう一つ、渡部委員のピースパズルに対する意見で委員の意見を反映してほしいという意見が出たが、私は若い人の感性でやっていってもらえれば良いのではないかと思う。参考にできる意見は参考にして、他は若い人の思うことを、若い人に受け入れてもらえる観点でそれぞれにやっていただき、私たちも必要があれば後押しをする形でやっていけたらと思う。

(瑠璃委員)

G7の関係で考えたことがある。G7と観光を結びつける時に来訪者が多く来ることについて、市民が面倒だと思うか、嬉しいと思うかということに気を付けなければならないと思う。面倒だと思うということは、他人事だからで、嬉しいと思うということは、自分が参画できることがあるからだと考えられる。つまり、当事者性をどうやって醸成していくかということである。「私も関わっている」という感覚を生むのが重要だ。例えば子育てで忙しい母親がどのように当事者として関われるかを考えた時に、無理がなく、興味のある事に注力するのが良かろう。なんでも良い。それこそ、被爆樹木について詳しいことや、被爆電車や碑巡りについて詳しいことなど、限られた時間を使ってできる、自分の得意範囲を持つことが重要ではないかと思う。そういったことを市民が感じて行動できる場を作るのが理想である。ボランティアで何かを説明したい、おもてなしをしたいという人をどうやって巻き込んでいくか、それをピースツーリズムと繋げていくのが大事だと思う。東京オリンピックでもそうであったように、今回のサミットでも、ボランティアの機運を醸成すると思われる。ボランティアの要請や支援を、サミット開催ギリギリになってやるのではなく、ピースツーリズムの取組の中で観光、道案内、広島景勝についての知識などを持った人々を今から育てて行くような動きがあれば良いと思った。

トリップアドバイザーで平和記念公園と広島平和記念資料館について投稿している人8,000人を対象にして行った調査によると誰かに会ったということが非常に大事であるという研究結果が出た。例えばピースボランティアに会ったことで、広島平和記念資料館の意味がよく分かったという回答や、地元の人と平和記念公園の木陰で話したことが印象に残っているという回答、その後も手紙のやり取りを行っているという回答など、人とのふれあいは、訪問者にとって宝となる経験になると思う。それは言葉が通じなくても手を振って見送りされたことが印象に残ることもあるし、そんな出会いや口コミから、来広者の裾野が広がっていくこともあるかもしれない。親近感から、もう少し広島について掘り下げてみようという方が出てくるかもしれない。そんな訪問者に対応するために、自分の得意範囲を市民が持てるかという話に戻るが、例えばピースツーリズムが運営・企画をして、被爆樹木の講習やワークショップを開き、参加者にはバッジや賞状のようなものを授与するというのもいいかもしれない。そういったことにより、個人個人への尊厳と参画の価値を認め、自分はこういったことに強いといった意識を醸成し、その人に連帯感や帰属意識をもたらすことが期待できるのではないかと思う。そういった人々、集団を育てることによりピースツーリズムに関わるアイデンティティを市民の中に育てて行くことができたなら良いと思う。一人一人が平和に関する施設や知識について専門性を持てるような働きかけをピースツーリズムの枠組みで具体的に打ち出していくことはできないかと思った。

(平尾委員)

改めて確認したいことがある。このピースツーリズムの懇談会が5年以上続いており、当初の想定よりかなり長くなっている中で、懇談会の位置付けや自分の役割が見えなくなっているところがあるため、今一度、懇談会の位置付けを明確にした方が良いのではないかと思う。というのも、世代間を越えていろいろな意見を聴取したいのであれば、ここに20代30代がいないのは少し問題だと思っていて、多様な意見を拾うということであれば、そういった人を入れるべきであるし、そうではないのであれば、もう少し懇談会の位置付けを明確にしなければ出口が見えなくなってしまうのではないか。意見を出して皆で考える場なのか、具体的なことに関してイエスかノーかを決定していくところなのかということを確認しておく必要があると感じた。

(畝崎委員)

私は拠点作りというのがとても重要だと思っている。それと平和大通りを散策してもらおうというのも大事だと考えている。ピースツーリズムといえば平和記念公園しかなく、一点集中型になってしまうところに、何とかもう一点拠点を作りたいと思っている。例えば、旧日本銀行広島支店のように、非常に近いところでシンボリックな被爆建物があるので、そちらに来訪者の興味関心に合わせたスポットや周遊のプランを提案するボランティアを配置し、その建物や施設のストーリーを語れるような人と人とのふれあいの場所をピースツーリズムの拠点として使えたら良いと思う。

先ほども例に出したような、松本若次さんの残した写真のように、戦争中でも市民が生き生きとした楽しい生活をしていたという写真を展示し、その環境の中で話を聞くことができれば素晴らしいと思った。

(大芝委員)

G7広島サミットのことで話をしたいと思う。渡部委員が言うように広島でのサミットはC7を特徴として打ち出せると期待している。C7サミット自体はサミット開催に合わせて行われてきたが、開催地が広島となればより特徴的なものになると思う。一つは前田委員が所属しているような被爆者団体があり、これまでのサミットとは異なっているのが特徴だと思うので、NPOなどと協力をして特徴として出していけると思う。二つ目は、復興・再生、あとは流行の言葉でもあるレジリエンスなどを打ち出していくことができるのではないかと思う。広島ならではの幅広く捉え、それらを特徴として打ち出していきたいと思う。三つ目は、今までのC7を見てもNPOやNGOが主体となって様々なことをしていくと思うが、それプラス、広島サミットでは地元市民の参加ということを特徴として打ち出せるのではないかと期待している。そして、これまでの話のとおり、人と人、対面で接することがC7広島サミットを振り返った際に特徴であったと言われるように持っていきたいと思っている。そのため、行政のサポートも得ながら、市民が参加する機会を作っていただきたいという思いがある。自主的に動く市民もいると思うので、そのサポートに回るというのも、今回のサミットの特徴としても現れてくるだろうし、瑠璃委員が言うような当事者性にも繋がっていくと思う。そういった意味で、今回のサミットをG7の首脳やメディアが来る機会として捉えるだけではなく、広島サミットの特徴は何かと問われたときに、NPO・NGOだけではなく、積極的な市民参加があり、他の開催地のサミットとは違ったという印象を持たれるようなサミットにしたいと思っている。

(渡部委員)

G 7に関して言えば、私も市民が多く関われるC 7、G 7になれば良いと思う。できれば市にC 7の窓口を設置してもらうのが理想だと思う。窓口を一本化するというのは大事なことなので、この機会にぜひ考えていただけるとありがたい。G 7のことで言えば、海外メディアに事前にジャーナリスト研修を提供するというのをいち早くやるというのが大事ではないかと思う。

プロモーションを行うに当たって注意すべき点が二つあると思う。まず、沈んだ気持ちや辛い気持ちを癒してくれるのは、人とのふれあいや、広島其自然風土であると思う。それをどう組み合わせると一つのツアーにしていくかということがあると思う。先日の8月6日に名古屋の団体が幅広い層の子供を連れて来たが、彼らは広島で過ごした後に佐伯区の湯来町に行き、そこで様々な体験をした後にもう一度振り返りを行ったそうである。これは被爆者が言っていた話で、原爆が落ちた後に最初に人間を力づけてくれたのは人間以外の生き物であったと。そういったことから自然とのふれあいについても考えるべき事柄かと思う。

もう一つは歴史の重なりが見える街、ツーリズムであってほしいと思う。若い女子学生に聞いた話だが、8月6日のことを思うと胸が潰れる思いがするが、8月5日までの人々の営みを知ることによって、8月6日の悲惨さと、8月6日より後の広島への愛おしさを感じるということをやっていた。こういった歴史の重なりを感じるような回廊を私たちが作っていきたい。そのためにいろいろな小さな拠点がたくさん必要で、その拠点がインフォメーションセンターの役割を果たすということができるのではないかと思う。

(橋村委員)

すぐに答えろという難しい問題かもしれないが、G 7サミットについて、観光業全体に言えることだがG 7サミット後から向こう5年にとっても期待を持っている。何故かという、G 7を行うことによって広島という街を世界に発信し、さらに、若い方も興味を持てるということがあると思う。G 7の開催地を実際に見に行こうというツアーもできるだろうし、実際に伊勢志摩サミット開催後は観光客が急増している。そのタイミングで平和学習とくっつけて何かできないかということを考えて時に、20代は何かの体験と一緒に絡んだ方が頭に残るのではないかと思う。例えば環境保全と一緒にという観点で見れば、被爆施設と一緒に清掃する、これはSDGsとも関連することである。こういったイベントやモニターツアーを作っていくと、比較的若い人も参加しやすいだろうし、平和のために自分たちは何かやったんだという体験になるのではないかと思う。

(松嶋委員)

ピースツーリズムに関わることでもあるので、座長から指摘があったことについて、現状について情報提供をしたい。G 7の関係だが、県民会議でも平和の発信についての取組をすることを発表しており、平和をテーマにしたイベントの開催やメディア向けの被爆の実相や復興をテーマにしたセミナーを開催する。あるいはSNSによる情報発信をすることは決定している。具体的にはまだ決まっていないという中で、市としても県民会議がどういったことを行うかという情報を見ながら、市として何ができるかをこれから検討していきたいと思っている。サミット開催が来年5月であるため、当日や当日以降来られる方に向けて何ができるかということを経営の事業も含めて検討して、平和を発信していきたいと思っている。

それと、話にあった袋町小学校、本川小学校の改修について指摘いただいたことについては、市も教育委員会も問題意識を持っている。なかなか更新ができないということについて、コロナ前は年間6万

人の来場があった施設なので、しっかりおもてなしができるような形にするために、施設の在り方、教育委員会の所管のままで良いのか、広島平和記念資料館と同じように資料展示も含めて検討していくのかという課題もあるが、学校は教育施設であり、地元の方との強い繋がりがあるので、そういったところも継続しながら良いものにしたい。また、体制についてもどういった形をとっていくか教育委員会と協議をしたい。

広大旧理学部1号館についても、今年になって劣化が著しく進んでいるということで、建物を今後長期的かつ安全に維持し続けるために、どういった技術的方策があるかという技術検討の業務を、今年、都市機能調整部が行っており、年度末にはその結果が出るため、どういった形で残すのか、それと並行して知の拠点としていくことは決定しているので、建物の内容や運営方針を含めて、基本計画を策定しなければならないので、それも並行して進めていくことになる。

また、被服支廠については県が所有する建物であるため、8月末に県が有識者を集めワークショップを行い、その中で平和や広島の歴史を学べ、体験する施設として資料館・博物館、あるいはツーリズムの拠点となるような施設ということも利活用のひとつのアイディアとして織り込まれていると承知している。ワークショップについては年度末まで数回開かれると聞いているので、その結果や委員の御意見も参考にしながら進めていくと望ましい形が出ると思うので、その結果が出た後、県や国と合わせて検討を進めていきたいと思っている。なかなか見えにくいところ、進まないこともあると思うが、どの施設もピースツーリズムに関連する施設であるため、時間はかかるが情報発信を行っていくつもりである。

(高石委員)

座長から指摘のあった行政の横の連携については、個々の問題というより、市行政全般的なことに対する指摘だと受け止めている。特に今回のG7サミットの対応については、県と市が連携を取りながら市の中でも局を超えて連携する必要があるというところで、難しさや新たな気付きがあるということを実感している。県民会議の状況について補足すると、大きい柱が4本あり、一番大きいのは平和の発信、その次に広島の魅力の発信、次がおもてなし、最後に安全安心で円滑なサミットの開催支援である。観光の部分で言えば魅力の発信というところで、先ほど話の出たプレス関係者向けツアーの実施や情報の提供ということをしっかりフォローしていきたいと思う。特に海外から来る方は広島に対する知識がある方とそうでない方が混ざってくると思うので、事前に広島の情報を提供していくというのが大切になってくると思う。

他にも、短い期間と言いながらも、予算を伴うものであれば、9月議会や12月議会で補正するタイミングもあるため、そこで県、市、財界を挙げてオール広島でしっかり対応していきたいと思う。その中でピースツーリズムを活性化するための取組をどのように行っていくかということを念頭に、注意を払いながら、チャンスがあればそこに盛り込んでいくプッシュ型の姿勢を取っていきたいと考えている。

(原田座長)

今日いただいた意見については事務局で整理いただければと思っている。先ほど平尾委員から懇談会の立ち位置が分からないため、もう少し整理をした方が良いという指摘を受けたように、焦点がぼやけるということはあるが各委員の意見を聞いているとこれは良くてこれは悪いという発言はほとんどないと思う。整理をしていくことは非常に難しいと思うが、その点に取り組んでいただきたいと思う。

最後に、今、ウクライナが戦争状態にあるが、150か国の海外からの要人の訪問を受けた中で、ウク

ライナから3団体の訪問を受けた。1団体は首都キーウの行政長官を迎えたのと、次はオデッサの市長、当時の駐日大使を迎えた。あの方たちが今どうしているのか心配な思いもあるが、各国との付き合いとなると、相手方の気持ちも考えないといけない。一つ一つ大切にして付き合いしていく必要があると思った。

もう一つは、ピースツーリズムの産みの親ともいえる阪谷氏が市民局長に就いている。松嶋委員の前任の村上氏はG7サミット推進室の担当局長になっている。そういった追い風もあり、我々の思いは十分理解しており、気持ちが通じるのではないかと思う。懇談会の今までの議論をしっかりと伝えていきたいと思うため、各委員の協力もお願いしたいと思う。懇談会も年2回で次は半年後であるため、その時にはまた違う意見も出るかと思うが、より良いものになるよう懇談会を進めていきたいと思うので、今後ともよろしくお願いしたい。